

## 梅若涙雨

咲きそめし花を散らして雨のふる おぼろ四月の隅田川

四角な壁に囲まれて 名に負うと詠まれた姿も今昔

せめて花待つ心も知らぬ 無情の雨のふることよ

女「去るもの日々に疎しとかや」

みれば女がわが横に 雨に打たれて音もなく

女「今日は弥生の十五日 人間憂ひの花盛り

この雨は 去りし日の 人商人にかどわかされ

柳の若葉もそのままに まかりし稚児の涙なり

人の親の心は闇にあらねども 子を思ふ道にまどひぬるかな

千年をわたす舟人よ おまへも念佛たむけてたべ」

はらはら言の葉散りみだる 女は香の煙と消え

あとに残るは きつつなれたる唐織ばかり

都鳥とみえるは白き波頭 みえるは白き波頭

青々なる春の柳を みそのに種ん

秋の初風に散らすとも わすれず春にや染まるらん

真葛が原の露をあつめし涙雨は 時の河にぞふりそそぐ

流れにさおさす われいちにんなり